

夏休みひとり旅

「 正成の太平記 」

2014-8-22～25 遠藤俊一



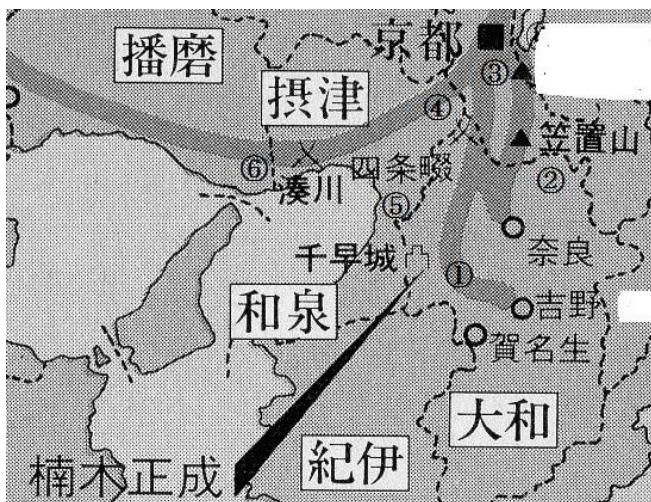
楠木・菊水の紋



楠木正成の像
(湊川公園・'09写)

私がもの心ついて夢中になって読んだ本は子供向けの「太平記」だった。
楠木正成が“菊水の旗”をなびかせて、赤坂城、千早城で鎌倉幕府軍相手に縦横無尽の活躍をするのに胸躍らせたものだ。いつか赤坂、千早の城に行ってみたいと胸に秘めていた。

今年も夏休みひとり旅を企画する春がやってきたとき、いくつか候補はあったがこの際正成をやろうと思った。ひとつ問題だったのはこれまでの5年間は“戦国武将シリーズ”と銘打って旅をした。羽柴秀吉、武田信玄、伊達政宗、織田信長、長宗我部元親だ。だが、正成は戦国時代ではなく南北朝時代の武将だ。一緒にできないではないか。どうしよう、う～ん、まあ、”武将シリーズ“とか、”番外編“とかすればいいか。それより行きたい所に行こうと自分を説得した。



今回の行程

- ① 千早城、赤坂城
- ② 笠置山、柳生
- ③ 京都
- ④ 桜井の駅、山崎の戦い
- ⑤ 四條畷
- ⑥ 湊川

「お客さん、ここが千早城の入口ですよ、あの階段を上っていくんですよ。どのお客さんもみんな途中で帰ってきますがね。本当に行くんですか。」

「そのために来たんだよ、もちろん上るよ。運転手さん、どうする？」

「お客さん、横浜からわざわざ来たんですよ、それじゃあ一緒にしますよ。おや、雨がぱらついてきましたね」

「大丈夫だよ、折りたたみの傘を持ってきたから。雨もたいしたことなさそうさ。さあ、上るよ。」

まっすぐに階段は延びていた。それも急勾配だ。でも、ザックはタクシーにおいた。娘からもらったお気に入りのオレンジの肩掛けポシェットに水のペットボトルと折りたたみ傘を入れて軽装だ、さあ上るぞ。

長い階段だ、100段くらいあるのだろうか、途中で2、3回は息を入れた。こういうときに決まって思いが湧いてくる。「何でこんなところに来たのだろう」、「こんなところ計画に入れなかったら良かったのに」、

「そんな事言っちゃしょうがないよ、元気出せ、そら、がんばるぞ」

ここを上りきると鳥居があった。何しろ千早城のてっぺんまでは560段ほどの階段を上らなければならないそうさ。水を飲む。ようやく運ちゃんが追いついてきた。

「ぜえぜえ、凄いですね、私初めてですよ、ここを上るのは。今までのお客さんは登って言って途中で帰ってくるのはここであきらめちゃうのでしょうね。分かりますよ。」

「運転手さんどうしますか、私はもちろん行きますが」

「ぜえぜえ、いえ、どうせですから付き合いますよ、でも先に行っていてください、ゆっくり行きますから」

「それじゃあ、先に行ってますね」

山道になり、くねくねした道を登ると階段がしばしば不規則に出現してくる。何度も水分休憩を取った。階段をあわせて500段くらい登っただろうか、ようやく上に着いたらいい。なるほど、こんな急勾配の山坂だから、鎌倉幕府軍は登るだけでも大変で、上から急襲する楠木軍の攻撃に手を焼いただろうな。木や大石を上から落とされたらたまったもんじゃないな。難攻不落の千早城だな、ふんふん。弓、槍、刀の時代では山城は決定的に有利だと改めて実感する。

「千早城跡」の板看板が見えた。時々聞こえていた運ちゃんの声も聞こえない。大分遅れたらしい。ここは本丸跡ではないだろう。二の丸あたりだろうか（後で調べたら四の丸だった）、すると奥に上り口があるはずだ。ちょっと見てこよう。案の定、奥に階段が見えた。しばらくして運ちゃんがぜいぜい言いながらたどり着いてきた。

「ぜえぜえ、いや～凄いですね、久しぶりに歩いたのでもう大変だ」

「ちょっと、休んでくださいよ、私のですがお水いかがですか」

「ぜえぜえ、いえ、結構です、それより写真を撮りましょう」

「そうですか、じゃあ、ここでこういうポーズで撮りますよ、お願いします」

「ぜえ、ハイ、パチリ」



千
早
城
跡



「ぜえ、ここから和歌山のほうが見えますね、海が見えますね、あれはどこだろう、ああ、関空ですね。関西空港ですよ」

この千早城は海拔 1 1 2 5 M 金剛山の中腹 6 6 0 M の所にある。河内から紀伊を見た事になる。

「本丸跡はこの上になりそうです。私は登ってきますが、どうします？」

「いえ、もう、私はここでお待ちしますよ、ふう～」

「そうですか、じゃあ」

千早城の階段は 5 6 0 あるという。残りの階段を登ってここが本丸か、さほど広くはない空間があった。そこそこにして戻る。運ちゃんと一緒に下山した。

今回のひとり旅、最大の目玉である千早城を踏破したんだ、思わず笑みがこぼれた。

2 0 1 4 年 8 月 2 2 日 金曜日、今年の夏休みひとり旅のテーマは「正成の太平記」だ。ザックをしょって我が家を出発だ。玄関前で妻に写真を撮ってもらう、「行ってきま～す」

(行
っ
て
き
ま
す)



「センター北」発 8 : 2 7、新横浜着 8 : 3 8、8 : 4 9 新幹線のぞみ 1 7 号は予定通りに出発した。新大阪も 1 1 : 0 6 に着く。地下鉄御堂筋線で天王寺に 1 1 : 4 5 到着。改札を出て構内を歩くとすぐそこは近鉄「阿部野橋駅」だ。急行吉野行きに乗り古市で乗り換え「富田林 (とんだばやし)」には 1 2 : 1 5 に到着、予定通り、順調だ。

駅前で金剛山行きのバスの時間を見る。1 2 : 5 0、1 3 : 2 0、1 3 : 5 0 があつた。腹が減っては戦はできない、どこかに食堂はないかな。ない、あわててそこらちゅうを歩き回る。結局最初にチラッと見た「お好み焼き屋」しかなかった。席も 8 ~ 9 人くらいの

店だ。20歳くらいだろうか娘さんが一人でやっていた。先客は一人、ビールとお好み焼きを食べていた。私もお好み焼きを注文、味はまあまあか。13:20のバスに乗る。

バスは市街をすぐに通り越し村に入っていく。15分位だろうか登り道になってくる。「千早・赤坂村役場前」で降りる。あたりを見回し「千早・赤坂村立郷土資料館」の矢印を見つける。7、8分くらい歩くと小高いところにあった。文化センターのような建物の隣が資料館だ。「楠公誕生地」の看板が目に入る。入口で入館料を払い中に入る。すぐにジオラマが目に入る。しめしめ、これで土地勘が分かるな。ボタンを押すと赤灯がつき、資料館、下赤坂城、上赤坂城、千早城、金剛山ロープウェイの位置がわかった。下赤坂城は歩いていけるな、上赤坂城も何とかなるか。でも、肝心の千早城は歩いては無理だな。バスはこの時間では1時簡に1本だ。千早城に登ってくるには1時間以上掛かるだろうし、私の頭の中のコンピュータが瞬時に駆け巡る。だめだ、バスの乗継だと暗くなってしまう、山の中だから危ない、タクシーを使うしかない。

郷土館の資料を正成のは丁寧に、それ以外は適当に見てから、事務所の女性にタクシー会社の電話番号を聞く。タクシーは20分くらいで到着するという。その間にどこか見物するところはないかと聞くと、歩いて5分のところに楠木正成産湯の井戸があるという。よし、行って見よう。道の向こうの階段を下ったところにそれらしいものがあつた。まあ、こんなもんだ。

戻ってもうひとつ大事なことを聞いた。

「菊水の紋はどこで見れますか」

「え〜と、ここにはありませんね、近くでは奉献塔にあるかもしれませんね、あとは、え〜と、建水分神社（たけみくまりじんじゃ）にもあるんじゃないでしょうか」

（帰って紀行文に載せる写真として是非ほしいのにはっきりしてよとは口に出して言えなかった）

タクシーが来た。結構年配の運ちゃんだ。赤坂城、千早城が見たいというと心得たとはばかりに出発する。いよいよ楠木正成の史跡めぐりだ。

今から683年前のことである。

元弘（げんこう）元年（1331）8月、後醍醐天皇は親政を目指し、時の鎌倉幕府を倒そうと京都御所を逃れ、京都の南端にある笠置山で旗揚げをした。源頼朝が打ち立てた鎌倉幕府は北条氏が執権として権力を握り、最後の執権高時の時代になっていた。幕府は笠置山を攻めるわけだが、この時に後醍醐天皇に呼応して挙兵したのが楠木正成であつた。こんな逸話がある。後醍醐天皇は大きな楠の木を夢で見た。そこで何か楠に関係することはないかと問い、河内に楠木正成という武将がいることを知った。この楠木正成を笠置山に呼ぶと正成は「正成が生きている限り、帝の御運は開けます」といい、河内に帰り赤坂城で挙兵した。

正成は永仁2年（1294）4月25日大阪府南河内郡千早赤坂村水分にて生誕、幼名を多聞丸といった。8歳の時、観心寺で滝覚坊について修学、16歳で大江時親につき軍学を修学している。赤坂城で挙兵した時は38歳の時である。

正成が挙兵し籠城した赤坂城は、今は国の史跡に指定されており、「下赤坂城跡」と呼ばれている。タクシーの運ちゃんは道を迷いながら「奉獻塔」にまず行ったが、残念ながら菊水の紋は写真に撮るようなものではなかった。元のバス道にもどり下赤坂城跡に向かう。学校の中に入っていった。千早赤坂中学校の一角が下赤坂城跡で、本丸跡は中学校敷地内にあった。難攻不落の赤坂城というイメージはあまり湧いてこない。高低さもあまり感じられず、本当にここで善戦したのだろうかという思いだった。本丸跡の西側には日本の棚田百選に選ばれた下赤坂の棚田があり、この風景のほうが印象に残るくらいだった。昨年インドネシアのバリ島に行き棚田の名所を訪れた。そこもそこそこだったが、棚田の本場は日本だろうと思っていた。赤坂の棚田も立派なもんだ。



赤坂城（下赤坂城）



赤坂の棚田

正成の赤坂城籠城戦では守る楠木軍500に対して攻める幕府軍20万、計略を用いて幕府軍を苦しめたが、この間に後醍醐天皇の笠置山も落ち、天皇は幕府軍に捕まってしまう。正成は自害したと見せかけて落ち延び金剛山に隠れる。赤坂城は一ヶ月あまりで落城した。

あの地形では一ヶ月持ったのはいいほうだろうと変に納得して千早城に向かった。赤坂城では難攻不落のイメージが湧かなかったが、千早城では十分に堪能したので気分を良くしていた。

元弘元年10月に赤坂城落城後、正成は姿を隠して密かに千早城を構築した。翌元弘2年（1332）11月に千早城で再び挙兵した。幕府は大軍を持って攻め寄せるが、ここからは楠木正成の軍略が縦横無尽となって活躍する。幕府軍を一手に引き受けて釘付けにする。私の少年時代の胸を躍らせた大活躍だ。その間に隠岐の島に流された後醍醐天皇が名和長年、児島孝徳らに救出され京を目指す。播磨では赤松円心が、九州では菊池武時が立ち上がる。そして関東では新田義貞が鎌倉を落とす。近畿では足利尊氏が幕府を寝返り、

後醍醐天皇に合流、京都の六波羅探題を落としてめでたく建武の中興になる。京都で天皇の親政が始まる。正に正成がいる限り帝の御運は尽きなかったわけだ。彼の千早城での傑出した働きが各地の武将の決起を呼び寄せた。大功労者ということになる。

私を感動させた千早城はこの後楠木党の本城として1392年正月に河内国守護の畠山基国に急襲されて落城するまで使われたそうだ。

千早城をご満悦で降りてきた私はタクシーに乗り込んだ。15:30くらいだったろうか、まだ時間はある。

「運転手さん、金剛山ロープウェーに行って」

資料館でもらった「千早赤坂村史跡案内図」に載っていた。乗り物が有って高いところに行く。私の子供心が見逃すはずはない。

ロープウェーは30分毎に出ていた。千早駅を出発、すぐに金剛山駅に着く。あまり時間はない。ここでの時間は30分にしよう。すると、山頂や上の神社まではいけない。いいんだ、いいんだ。ここに来ること自体で意味があるんだから。そう自分で自分を言い聞かせて早足を始める。「星と自然のミュージアム」を通り過ぎ、「金剛山展望台」まで行く。この間およそ15分。あまり展望は良くない。くるとUターン。帰りは林間の散歩道をまた早足。来た時乗ったゴンドラがまだ待っていた。滑り込みセーフ。ああ、忙しかった！



金剛山ロープウェー

再びタクシーは走る。

「お客さん、上赤坂城に寄りますか」

「えっ、近いの」

「まあ、帰り道ですよ」

「よし、行こう」

先ほどの千早城入口を過ぎ、下ってゆく。しばらく行くと、山の中の畑のようなところで停まる。

「お客さん、この先が上赤坂城の登り口ですよ」

見ると向こうに看板が見える。行ってみると、「上赤坂城跡」と書いてある。

「ここが入口か、よし5分ほど入ってみよう」

私の城跡踏破の定義は大手門か入口らしき所から中へ自分の足で入ることである。本丸跡にはこだわっていない。つまりこれで上赤坂城（楠木本城）に行った事になった。



楠木城
(上赤坂城跡)



建水分神社

次に運転手は「建水分神社（たけみくまりじんじや）」に向かった。ここは楠木一族の守護神である。本殿は国の重要文化財になっており建武新政期の建武元年（1334）に後醍醐天皇の勅願により正成が再建した。生活に無くてはならない用水を公平に分配するのが水分である。「みずくばり」から「みくまり」と変化したらしい。楠木正成の菊水の紋はここから来ている。菊は皇室の紋で後醍醐天皇より正成の忠誠に対して下賜され、下半分の流水紋は楠木氏が氏神として崇拝したこの神社が水の分配を司る神であるためとされる。「ふ〜ん、そうか菊水の紋の由来ってこうだったんだ」
なにか得した気になった。

あたりはそろそろ暗くなってきた。

「運転手さん、かんぼの宿まで行ってくれる」

「はいはい、わかりました」

資料館で最初に乗ったとき宿をほのめかしていた。運ちゃんがとても親切だったのは人柄によるものもあるだろうが、かんぼの宿まで乗ってほしいと思った商売上手なこともあるのかな。

「かんぼの宿・富田林」には富田林駅には戻らず、いったん山を下りまた一山のぼって到着した。私のイメージでは、かんぼの宿とか国民宿舎はその地の風光明媚な地点に構えている。去年のひとり旅「元親・四国の蓋になる」で泊まった「あわの抄」は旧かんぼの宿だった。それが奇しくも元親因縁の白地城跡に立っていたものだ。あの時は当時の秘書だった小野寺さんが手配してくれたんだなどこの地に着いたとき懐かしく去年のことを思い出した。

今年のこの宿は今の秘書の鈴木せり奈さんが手配してくれた。料理も私の嫌いな肉なしで良いものを頼んだと聞いていた。風呂上りに出てきた料理は「松茸づくしプラン」というものだった。食前酒はかりん酒から始まり、松茸麴漬、松茸土瓶蒸し、お造り、焼き松茸、松茸と海鮮鍋、松茸天麩羅、松茸茶碗蒸し、赤だし汁、松茸釜飯、香の物、デザート。地酒でちびり、ちびりとやり、幸せだ。う〜ん、今夜は夢にも松茸が出てきそうぞ。帰って鈴木さんに話したら羨ましがられるだろうな。何かの時に松茸をご馳走してやるか。

ほろ酔い気分で4階だったか展望室に行った。休憩用の椅子に座ると大きなガラス窓越しに大阪の夜景がファンタスティックに見える。手前の山が黒く見え、その向こうにキラ

キラと光って見える。なかなかのものだ。独り占めにするのももったいない。女房、子供、孫達にも見せてやりたいぞと思った。

8月23日土曜日、二日目だ。宿の送迎バスに乗って富田林駅に向かう。8:56近鉄長野線準急大阪阿部野橋駅行きに乗る。再び戻って阿部野橋駅から歩いてすぐ天王寺駅に行く。JR関西本線「大和路快速」加茂行きに乗る。法隆寺、奈良経由という字を見ると不思議な気がする。えっ、奈良を通るのか。どうも地図が浮かんでこない。大阪、京都、奈良はこんなに近いのか。昔の名で言うと河内、山城、大和だが、私にはさっぱりわからない地理感覚だった。加茂で乗り換えて笠置駅には10:49到着だった。

ホームに降りると看板が目についた。なにっ、驚いた。観光案内の看板で「笠置町・柳生の里観光案内マップ」と書いてある。えっ、えっ、柳生ってあの柳生だろ。なぜ笠置（京都）と柳生（奈良）が一緒なんだ。そんなに近いのか。

笠置・柳生の観光案内マップ



右の青い山が笠置山
左の町が柳生

一昨年（2012）、4/6'金）～9（月）私はひとり旅をした。テーマは「吉野の桜と柳生街道を歩く」だった。大和郡山城を見て念願の桜の名所吉野を訪れた。宿舎は8年前に「雨の大台ヶ原・そぞろ歩き」の時に泊まった樫原オークホテルにした。しかしこの年は寒く吉野の桜は一厘も咲いていなかった。それでも、金峯山寺（きんぶせんじ）から後醍醐天皇の御所、楠木正行の残した和歌、そして奥吉野、義経の隠れ家まで二日目を丸一日歩いた。三日目が柳生街道を歩き奈良から柳生の里まで歩いた。東映の時代劇ファンだった私は中村錦之助扮する宮本武蔵になったつもりで孤児の城太郎を従えたあの山道を登った。柳生の里では陣屋跡（柳生城）をはじめ見所はあらかた訪れた。園城寺だけが行けなかった。次の日最終日は平城京で太極殿、朱雀門、遣唐船を見て帰ったものだ。

その柳生がこんな近くのところにあるのか。不思議な縁だなとは思ったが今日の目的地は笠置山だ、後醍醐天皇だと思い直した。駅の貸しロッカーにザックをはじめ衣類や要らないものを預けた。お気に入りのオレンジの肩掛けポシェットに傘や手拭い、インスタン

トカメラ、自販機で買った水を入れて足取りも軽やかに笠置山に向かった。山頂で昼食をとろうと思いコンビニを探す。ない、そんな気の利いたような店はない。パンでもいいかと思ったが、店はきれいではなく賞味期限も危ない感じがして買うのをやめた。なんとかなるさと自分をだまして歩き始めた。10分位歩いたのだろうか笠置山の登山入口に着いた。いよいよ後醍醐天皇の笠置山籠城戦の舞台に上がることになる。

笠置山は国名勝・国史跡で288Mである。この山頂にある笠置寺は天智天皇の皇子の頃に開かれたという。ここで元弘元年（1331）8月に後醍醐天皇は倒幕を目指して立て籠もったが一ヵ月後に落城、逃げた天皇も井出の有王山中で捕らえられる。この時笠置寺は全山焼け落ちた



ハイキング入口



笠置山から見下ろす

笠置山の古い石碑のところまで道が分かれていた。車道でなく、「史の道・ハイキングコース」と書かれている階段状の道を登る。汗が流れ出す。誕生祝で買ってもらった顎紐付きの帽子もじっとり濡れてくる。小休止、汗をぬぐい、水を飲む。この繰り返し、繰り返し。

雲行きがおかしくなり遠くでごろごろと雷の音が聞こえる。昨夜の天気予報もそんなことをいっていた。少し急ごう。こんな山道で雨と雷に襲われたら素人の私ではたまったものではない。40分くらいで人家が見えた。料理屋兼旅館であった。幟にきじ料理、釜飯と書いてある。2軒、連なっている。よかった、飯が食える。雲行きもおかしいからここで様子を見ながら昼食としよう。近いほうの松本亭に入る。そのとき反対方向の道の標識が目に入った。「柳生へ」と書いてあった。「えっ、ここからも行けるのか」

昼食は、きじなんてとんでもない、肉はいやだと山菜釜飯を頼む。冷たいお絞りが何よりのもてなしだった。麦茶の冷たさもいい。しばらくすると汗も引いてきた。お姉さんと無駄口をたたく。このコミュニケーションがひとり旅の楽しみだ。笠置寺はすぐ上にあるという。そして何気なく聞いた。

「あそこに柳生って書いてあるけど、どの位かかるんですか」

「ええ、すぐですよ、20分くらいでいけますよ」

「えっ、そんなに近いんですか」

「そうですよ」

う〜ん、どうしよう。そんなに近いのか。2年前に柳生に行ったときはもうここは一生来ることないだろうなと思った。見所で見逃したのは園城寺だけだし。その柳生がこんな

に近い。柳生を目的で来ることはもう無い。しかしこんなに近いなら、その園城寺を見てくるか。迷ったがいつてみようかという心が強そうだ。まあいい、笠置寺を見てからだ。その時の心にまかせりゃいいや、なんせ、ひとり旅なんだから。

山菜釜飯はまあ普通の山菜で、まあ普通の釜飯だった。それでもおいしくいただいてリフレッシュ、3、40分はそこにいたのだろうか出かけることにした。あまり気がつかなかったが、雨が降ってそしてやんだみたいだ。道が少し濡れていた。階段を少し上るとすぐに山門が見えた。笠置寺である。入山して山をひとめぐりする行場で1周30分ほどを下り上りするコースである。確か300円の入山料だったが受付に人がいない。しばらくうろうろしていたら、庭の補修工事をしていたらしいおじさんが来て言った。

「管理人はもう帰りましたよ。さっき、雨が降って岩がすべるので危険なので入場禁止にして帰りましたよ。」

「えっ、じゃあ入れないんですか」

「もう、雨も上がっているから大丈夫ですよ、そこから入ればいいですよ」

「でも、お金は」

「いいですよ、いつてらっしゃいよ」

なにか儲かった気がした。それに見たところ雨で濡れていそうなところはまだ見えない。ここは磨崖仏が有名だ。巨岩に弥勒大磨崖仏を刻してある。仏さんはあまりよく分からないが見上げるばかりの巨岩である。細い道を下って胎内くぐり、太鼓石、平等石、東ののぞき、西ののぞき、などを通る。こういうところから岩や大木を落として攻めあがる幕府軍に抵抗した。攻めるほうも苦労したな、急な崖だ。これはもう山城だなと思った。

そして、階段をのぼると石柵と鉄扉に囲まれた後醍醐天皇の行在所に出る。いわばここが笠置城の本丸だ。それでも城とは言わないそうだ。天皇がいるところだから行在所（あんざいしょ）だって。私の城コレクションにはどうしよう。やっぱり、城だよ。籠城戦だってあったんだ。私の城踏査コレクションには入れておこう。そして、しばらく後醍醐天皇に思いを寄せた。



後
醍
醐
天
皇
行
在
所



山門を降りる。あの分かれ道に来る。どうしよう、柳生に行くか、笠置駅に戻るか。駅と思いついたときロッカーに預けた荷物を思い出した。私は柳生に行ったらそこから今日の宿舎の京都駅に向かえばいいと思っていた。だめだ、荷物がある。笠置駅には戻らねばならない。う〜ん、でもこの機会を逃したらもう柳生に行くことは無いよな。これは神様が柳生へ行けって言っているんだよな。柳生へは20分もあれば行けるって言ってたよな。

俺、ひとり旅してるんだよな。ひとり旅にハプニングはつき物だよな。いや、ひとり旅だからこそ想定外のハプニングが実現できるんだよな。ええい、行こう。

もう、2時はとうに過ぎていた。少し急ぎ足に山道を歩く。上る下るでなくほぼ平らな道を歩いているようだった。しばらくして山道が終わる。車道になった。そこから下ってゆく。どうやら奈良県に入ったみたいだった。ゴルフ場を通り過ぎる。20分じゃ着かないね。まてよ、柳生まで20分といったけど、柳生のどこまでが20分だ。我が家のある都筑区だって端から端ではかなりある。本当に20分でつくのか。ゴルフ場帰りの方が俺を車に乗せてくれないかな。だんだん弱気になってくる。足も疲れてきた。何しろまた笠置へ帰らなくっちゃならないのだから。

ようやく人家が見えてきた。でもここはどこなんだ。俺が覚えているのは2年前バスから降りたあの信号のところだよな。帰りにバス待ちでコーヒーを飲んだ陶器屋さんだよな。もう歩くのイヤになってきたね。バス停が見えた。でも、人などいそうに無い。がバス停があるってことはこの先が街中だろうな。あっ、向こうに信号が見える。こちらに来て初めて見た信号だった。その信号があるところに来てみると見覚えがあった。あのコーヒーを飲んだところだ。奇跡だねこりゃ。陶器屋に入る。とりあえず、草もちと夏みかんジュースを頼んだ。一息ついた。

おばちゃんとひとり旅コミュニケーションを図る。2年前にここでコーヒーを飲んだと言うと嬉しそうにしてくれた。まずは帰りの算段をしなくてはならない。

「笠置に行くバスはあるのかな」

「いえ、ありませんよ、バスは奈良に行くものばかりですよ」

「じゃあ、笠置に行くにはどうするの」

「みんな歩いていきますよ」

「えっ、笠置山を越えてゆくの（疲れるじゃん）」

「いえ、麓をぐるっと回っていくんですよ」

「何分くらい？」

「ほんの4、50分くらいですよ」

「もう疲れているよ、じゃあタクシーを呼べますか」

「この町にはタクシー会社は無いんですよ。2年前ほどにつぶれました」

「えっ、どうしよう。タクシーを呼ぶにはどうするの」

「奈良の町から呼びますが、1時間くらいかかりますよ、お金ずいぶん高くなりますよ」

「う～ん、ほんと、困っちゃった」

こういうことを途方にくれたと言うんだなと思った。しょうがない、もう奈良からでもタクシーを呼んでもらうしかないと思腹をくくった。

その時、おばちゃんが知り合いの個人タクシーがいるから連絡してみましようといってくれた。ごそごそと何かを探した。古い名詞だった。連絡がつき加茂からタクシーを回して

くれることになった。20分くらいで来るという。私はもう一杯、シークワーサジュースを頼んだ。五杯分でも十杯分でも払ってもいいくらいだった。

タクシーが来た。私は園城寺行きをとうに諦めていたけど、タクシーでなら別だ。こうして2年前に見逃した園城寺見物が出来た。国宝、重要文化財の仏像やお堂があり、なかなか落ち着いたお寺であった。

笠置駅に帰ることになった。16:28の関西本線加茂行きに乗る計画だった。柳生で途方にくれたときは計画の遅れは覚悟していた。タクシーが来た時すぐに笠置に向かえばよいが園城寺を選択したので計画変更をやむなしとした。

時計を見ると16:00を過ぎていた。なにか時計の進みが遅いように感じた。到着が微妙な時間になりそうな感があった。16:24笠置駅到着。タクシー料金は手に用意してすぐに払う。おつりをもらう。ロッカーから荷物を引き出す。ザックに荷物を入れ替える。こういうときに忘れ物とか何か手違えがよく起こる、注意しないと自分で自分に言い聞かせる。切符を買う。改札を通る。階段を上って降りる。列車に駆け込む。これを4分間で出来るか不安が有った。むしろ無理だろう。でもやるっきゃない。階段を上るところまでは何とかできた。ここで日ごろの運動不足と今日の笠置、柳生での足疲労がたたった。上り階段もあと2、3段のところであつちやうと立ち止まってしまった。息がぜいぜいと音になる。万事休すか。(運転手さん、待って〜!)とは恥ずかしくて叫べなかった。代わりに「き・つ・い〜」と大声を出した。階段を走り降りると駅員が早く早くと手を振る。どうやら私に気がついて列車を少し停めてくれていたらしい。列車に駆け込むとドアが閉まりゆると発車した。私はザックを背負ったままうつむいて膝に手をやり息を整えるだけだった。

加茂駅には16:33着、JR関西本線(快速)難波行きは16:43発、木津駅からはJR関西本線(普通)京都行きに乗る。17:43なんと計画通りに京都駅に着いた。

駅前の「ドリーミン・プレミアム京都駅前」にチェックイン。やれやれだ。京都では湯葉か京漬物、竹の子が食べたかったが遠出をする気が起こらなかった。どこかいいところないか。そうだ、京都にはかなり来ているので見所はほぼ済ませている。でも、駅前の京都タワーはまだ行っていない。景観を乱すとかで問題になった建物だが、近頃はすっかり定着したようで悪い噂には上がっていない。この際やっつけよう。

タワーのエレベーター入口では十数人の人の行列だ。地上100Mの展望台にはかなりの人たちで込み入っていた。中国人らしき人も目立つ。ゆっくり一周して夜景見物はおしまい。まあ、こんなもんだろう。地下まで降りて居酒屋風の店に入る。ほろ酔いセットで一息つく。京料理じゃないけど腹は満たされた。今夜は後醍醐天皇や楠木正成たちも見たであろう「京の夢」でも見よう。

「建武の中興」では氏素性の高い足利尊氏、新田義貞、大塔宮が倒幕戦の大功労者にな

る。その次になるが、我が正成も後醍醐天皇に頼まれて倒幕の主役になったのだから建武の政権が成立して摂津、河内両国の国主また守護となった。河内の小土豪にすぎなかった正成にとっては大抜擢であった。彼は後醍醐天皇に衷心から感謝をし、忠誠を誓ったに違いない。視点を変えると、正成は後醍醐天皇の最も忠実な側近軍事力にされたことになる。

建武の政権が公家、寺社の利益を優先させ土豪や武士の欲求に応えなかったため次第に崩壊してゆく。そして、いわば武士階級の代表として足利尊氏の離反を招く。正成の京の夢も前半は快く、次第に苦いものとなってゆく。

8月24日、三日目の朝がきた。今日は正成、正行（まさつら）親子の涙の別れ「桜井の駅」に行く。すぐ側に羽柴秀吉が「中国の大返し」のあと明智光秀と戦った「山崎の戦い」の戦場があるので、その前にそこにも寄ってゆこう。それから、正行が戦死した四条畷にも行く。そして神戸まで出て宿泊するのが予定である。

J R 東海道本線須磨行き、10:45 京都発で 11:00 に「山崎」に到着する。桜井の駅がある阪急「水無瀬」駅はすぐ先なので途中下車して秀吉、光秀の山崎合戦の地を見ることが出来る。まずは土地を知るために「大山崎町歴史資料館」に寄ることにする。J R 山崎駅で「おおやまざき散策マップ」を手に入れ駅を背にすると2、3分で阪急「大山崎」駅を通る。すぐ先に資料館があった。200円払って中に入る。

大山崎は天王山が淀川へ最もせり出した場所を意味する。その自然の関門とでもいうべき地形から日本の東と西を結ぶ交通の要衝として古代から発展してきた。

資料館には7つのコーナーが設けてあったが山崎合戦のコーナーしか興味が湧かなかった。さっきの散策マップを見、このコーナーに来た時には私の態度は決まっていた。よし、天王山に登ろう。天王山の名に憧れた。予定外だけどひとり旅だからいいだろう。それに、戦場はそこに行くより高いところから見たほうが良く分かるということは、信玄・謙信の川中島や政宗の人取橋、摺上原で分かったことだ。上から見ろぞ。



天王山

11:40、資料館の側のコンビニに寄る。おにぎり二つに納豆まき、お茶とデザートのみかんゼリーをザックに入れる。天王山山頂でお昼を使えばいい。さあ、出発だ。もとの山崎駅の方に向かう。手前を右折して線路を渡り次第に上り坂になる。

宝積寺に立ち寄る。秀吉が山崎の戦いで本陣とした場所である。閻魔王坐像など重要文化財が多くあるそうだが素通り。杖があり自由に使ってくださいとある。ありがたく拝借

する。いよいよ山道だ。

一昨日の千早城、昨日の笠置山、柳生の里、今日は天王山だ。流れる汗にはもう慣れた。なんていきがっていたのは初めだけ。ふうふう、ぜいぜい、腰につるした手拭いも汗びっしょり、どうもこの帽子は汗を吸いすぎる。厚い布地なのに汗でぐっちょりだ。歩幅も狭くなり、ピッチも遅い。ようやく旗立松（はたたてまつ）の展望台に着く。ここには山崎合戦で天王山を奪取した秀吉軍が平地の自軍に旗印を揚げた松がある。はるか下を見ると名神高速道路が通っている。名神大山崎のインターチェンジがぐるぐると大きく円を書いている。



山崎の戦い（旗立松）



宝積寺
（秀吉本陣）

旗立松展望台にある山崎合戦の陣地図によると、あのインターチェンジ辺りで両軍が激突したらしい。両軍の陣構えを陣地図と照らし合わせながら見下ろした。一番向こうで秀吉軍の池田恒興と光秀軍の斉藤利三が対峙した。真ん中で中川、高山、堀、木村に対して阿閑、明智か。こっちが宝積寺で秀吉の本陣か。両軍の陣構えが分る。目をつぶると光秀の悔しそうな顔が現れてきた。天王山奪取戦に勝って心理的にも優位に立った秀吉は4万の軍勢で1万6千の光秀軍を圧倒した。

ここらは天王山ハイキングコースになっており、コース沿いに「秀吉の道」という陶版画が6箇所設置されており秀吉の天下取り物語が解説されていた。歩き疲れて休憩を取るのには都合よく配慮したのだろう。ほかにも登ってくる人はぼつりぼつりといた。みんなペースの遅い私を追い抜いてゆく。しょうがないよ、俺ももう70歳をすぎたんだからと自分を慰める。「十七烈士の墓」というのがあった。幕末に禁門の変で敗れた長州武士や久留米藩士・真木和泉たち17人が自刃した墓だそうだ。

雨がポツリポツリと降ってきた頃、酒解神社（さかとけじんじゃ）に着いた。もう、山頂はすぐそこにある。標高270m、天王山山頂という碑があった。ここは山崎城本丸跡でもある。山崎の戦いで勝った秀吉は、この後大阪城に移るまでの1年ちょっとをこの山崎城を修復して居城とした。今回の旅での発見だった。姫路城のあと秀吉の居城は山崎城なんだ。これは結構知られていないぞ。俺は知ったぞ。何か嬉しくなってきた。

雨模様だし、ここでは昼食を使えない。下の酒解神社も適当なところは無い。ぐずぐずしていると雨が本格的になってしまうかもしれない。昼食より先に下山してしまおう。そ

う、決断した。神社の前で下から上がってきた中年女性が山頂は近いかと聞いてきた。それがきっかけでちょっとした城談義になった。私のうんちくが始まる。彼女の質問、どの城が良いかと聞いてきた。初心者には姫路城、玄人には彦根城を勧めると答えた。私の鼻がまた高くなった。

麓近くになって進路を往きとは違い左にとった。観音寺が見えてきた。ここには休憩小屋があった。13:50、ここで昼食にした。とたんに雨が強くなってきた。私の判断は正解だった。山でこの雨だったら大変だ。天は我に味方した。おにぎりも、納豆まきも、みかんゼリーも、みんなおいしかった。ここで杖を返し阪急大山崎駅に向かった。

建武2年(1335)、足利尊氏、直義(ただよし)兄弟は新田義貞の誅伐を呼号して関東で兵を挙げ上洛、京都を占領する。しかし、北畠顕家ひきいる奥州軍の西上に力を得た正成、義貞たち官軍はようやく尊氏を九州に追い落とす。その尊氏は九州を平定し、わずか1ヶ月で博多をたち上洛の途についた。慌てふためく天皇、公家に正成は最後の戦術上の意見を具申する。いったん京を落ち、尊氏軍を京に入れる。京を封鎖して兵糧攻めをする。疲れた頃に総攻めをするという策だった。しかし、京を出るのがいやな公家に反対され、正成は少ない手勢を率いて心ならずも決戦の地、兵庫湊川に向かうことになる。この途中で我が子正行と涙の別れをする場が「桜井の駅」である。

14:42水無瀬に着く。駅前の案内図を見ると徒歩5分で史跡桜井の駅跡に行ける。小雨の中、傘を差して歩く。何かゆったりとしていい感じだった。

公園の中に楠公父子別れの像があり、その他やたらと石碑が多い。乃木希典の書「楠公父子訣別の所」、東郷平八郎書の明治天皇歌碑、頼山陽作「過桜井駅詩」、明治維新後の大久保利通あたりだろうか、正成を天皇崇拝に利用しようとしたのではないかと疑った。もう少し古臭ければ良いのと思うほど整備された公園だった。



(楠公父子)
桜井の別れ



(乃木希典書)
楠公父子訣別の所

すぐ前に島本町立の歴史文化資料館があった。雨宿り兼一休みと思って入場無料の中に入った。近所の子供たちが3、4人将棋を指していた。

すぐ目の前がJR島本駅であった。何のことは無い、さっき阪急大山崎から乗ったがJR山崎に出てれば直接島本に来れたのだ。

15:30島本から大阪へ15:50、京橋には16:07、学研都市線で四条畷には

16：30に到着した。

雨がかなり激しくなってきた。駅前でタクシーに乗る。四条畷神社に行ってもら。この祭神は楠木正行だ。

正行が桜井の駅で父正成と別れたときはまだ11歳の時だった。父に従って戦場に行くという正行に正成が言った。お前はまだ子供だ。父が兵庫・湊川で死ねば天下は尊氏のものとなる。一時の生命を惜しんで降人にはなるな。一族郎党の一人でも生き残っている限りは父が戦ったように金剛山に籠もって戦い、天皇に忠誠を尽くせ。それが私に対する何よりの孝行だ。

これが桜井の別れである。それから11年。1347年、22歳になっていた正行は南朝の北畠親房の一斉蜂起の呼びかけに応じる。楠木流の戦で足利軍を悩ませ大いに戦功を上げる。しかし大勢としては利あらず、翌1348年（正平3、貞和4）四条畷で壮烈な戦死となる。この直前、上赤坂城（楠木本城）を出陣した正行は吉野の御所を訪ね後村上天皇に拝謁する。もう亡くなっていた後醍醐天皇の御陵にも参拝し如意輪堂に立ち寄った。壁板に一首を書きとめた。

「返らじと かねて思えば 梓弓 なき数にいる 名をぞとどむる」
2年前に吉野と柳生に行ったとき、あの吉野で見た歌である。

タクシーを降りたときは土砂降りの雨だった。運転手さんが貸してくれた傘をさすが膝の上くらいからびしょ濡れになる。それでも一応お参りしなくっちゃ。何しろ楠木正行は神様になっているのだから。ここでも明治政府の楠公父子の政治利用を思った。



四条畷神社

なにしろバケツをひっくり返したような土砂降りだ。早々にして車に戻る。帰りがてら運ちゃんが野崎神社に行きますかと聞いてきた。お染久松の野崎参りである。東海林太郎の「野崎小唄」に縁のある神社だ。私のカラオケメドレーのひとつだ。私が外すはずがない。いってみようと答えた。小さな石の碑にお染久松の文字が見えた。

四条畷17：20発、大阪の地下鉄に繋がり尼崎を経て神戸の三宮には18：15到着。宿は秘書の鈴木さんが手配してくれた「神戸・東急イン・三宮」、駅から2分ということだったが、方角を間違えてしまい10分くらいかかってチェックインした。

シャワーを浴びてしばらく休憩。夕食はなににしよう。昨年、実業団卓球大会で神戸に来た時は監督の岩瀬と神戸の町を散策しつつ「明石焼き」を探した。結局そういう店は見つからず中華にした事を思い出す。よし。今晚は明石焼きだ。ホテルからガードをくぐり駅の向こう側に行く。繁華街だ。「明石焼き」の看板が目に入る。飛び込んだが満員で追い出される。ぶらぶら歩く。ない。居酒屋のようなお好み焼屋の様な店があったがなにか店がいかかわしい。やめた。明石焼きを探してさらにぶらぶら、またぶらぶらする。足が疲れてきた。もういいや。結局、餃子のはしごをしてホテルに帰り眠りに着いた。

4日目、最終日だ。10:10にホテルを出発する。神戸高速鉄道で「高速神戸」駅に着く。湊川神社はすぐ目の前だ。神社の門に張り巡らされてあった提灯には菊水の紋が晴れやかに浮かび上がっていた。私が求めていた被写体そのものだった。

建武3年（1336）、九州に一時敗走した足利尊氏、直義軍をここ湊川で迎え撃った正成であったが、次第に戦況不利に追い込まれ、弟正季（まさすえ）と刺し違え、一族はここで自害して果てた。

この湊川神社の境内西北隅に楠木正成戦没地がある。明治元年（1868）、明治天皇が神社創始の御沙汰書を下し、1872年、楠木正成（大楠公）を祭神として別格官弊社として創建された。そういえば、あの四条畷神社も別格となっていた事を思い出した。

菊水の提灯と門をくぐると左側に宝物館があった。300円を払って中に入ると大楠公に関する品々が展示されてある。「大楠公御一代記」を辿ると、それは私の今回の「一人歩き」の道筋そのものだった。私の鼻先が自慢げにひょこひょこと動いた。2階に上がると「桜井の訣別～楠公父子別れの名作」コーナーがある。絵、掛け軸、屏風に混じって「楠公の歌」の歌詞が置いてあった。（青葉茂れる桜井の～）で始まるあの歌である。なんと、15番まである。えっ、この歌は15番もあるのか。びっくりした。桜井の別れから始まり、湊川で敵軍襲来を見、弟正季と奮闘、刺し違える。15番の最後は（～心も清き湊川）で閉められていた。

本殿にお参りし、徳川光圀の筆による「嗚呼忠臣楠子乃墓」を見て楠木正成への私の追っかけは終わった。



湊川神社



楠公の墓

時計を見ると12時のお昼にはまだ時間がある。正成は終わったがここまで来たのだからもう一箇所くらい見てみようかと考えた。さっき地下鉄を降りたとき駅で「須磨浦・山上遊園へロープウェイで」という広告看板を思い出した。須磨の浦といえば関西の有名避暑地だし、歌枕に良く出てくる場所だ。それを疲れずに山上までいける。よし行こうとすぐ決めた。

地下鉄でそのまま「須磨浦公園駅」にゆく。駅前の案内図を見る。なんと、ここはあの源平合戦での「一の谷合戦地」だそう。徒歩10分で行ける。私が見逃すはずが無い。

松ノ木が涼しそうに連なっている公園を歩くと「源平史跡・戦の浜」の碑はあった。その先の一の谷だったという所まで歩いた。二の谷、三の谷もあったという事をここで初めて知った。一の谷のすぐ上にあの鶴越（ひよどりごえ）があったんだなと嬉しくなった。これは後になって分ったことだが、実際には鶴越の下には一の谷はないという地形だそう。そんなロマンを壊すような事をあの時は知らなくて良かったよ、もう。

一の谷で有名なことは、あの平家の公達・平敦盛だ。熊谷次郎直実によって討ち取られた16歳の笛の名手である。その敦盛塚が側にあるというのでそこに行った。実は看板で見ていたのだけど、そこに名物の敦盛ソバが売っている。それが食べたくて、ちょうど昼食に良いわいと暖簾をくぐった。まあ、ざるソバだけど現地で敦盛の名がついているとそれはそれで気分になる。おいしくいただいて、さあ、ロープウェイで山上に行くぞ。



源平・戦の浜
碑



敦盛塚

人も少ないロープウェイに乗ろうとすると変なおばちゃんが一人でもぞもぞしている。怖い怖いといって中に入らない。そうかといってお先にどうぞとも言わない。しょうがないので「大丈夫ですよ、一緒に乗りましょう」と言ってやった。こわごわ乗り込む。怖そうに下を向いている。「外がきれいですよ」というとちょっとだけ目を上げた。

上がったところは東部展望台という休憩場だった。展望が良く冷房も効いていて快適で、遠く明石海峡大橋が良く見え、目の下の方は須磨海岸の海釣り公園が見えた。私はボックス状のカーレータというものに乗ってさらに上に行った。ここで降りるつもりだった。

なにも山上の遊園地まで行くことは無いと思っていた。ところがそのキャッチフレーズが良かった。

「リフトで摂津から播磨の国へ行きませんか」

そうか、ここは国境か、なら行ってみようか。人間なんて他愛の無いもんだね。やっぱり気分しただいよ。

この観光リフトはちょっと珍しいものだった。普通は山に上る、あるいは下る、スキーリフトだってそう。ところがこのリフトはいったん下がってゆく。中間辺りから今度は上がっていった。谷に沿って下って上ったのだ。そして私は摂津の国から播磨の国に着いた。遊園具には興味の無い私だったが「日時計と青葉の笛広場」ではザックを下ろして休憩の時間をとった。今度は「青葉の笛」の歌だ。ボタンを押すと森繁久弥が朗々と歌ってくれた。(一の谷の戦破れ、討たれし平氏の公達哀れ～～) 懐メロも良いもんだ。

神戸に帰り、新神戸でお土産に伊勢の赤福を買い、新幹線に乗り、新横浜ではお決まりで崎陽軒のシューマイを買って我が家に帰った。ちょっと遅い夕食に間に合った。(完)